

主 題：迫り来る神のさばき 2

聖書箇所：ローマ人への手紙 1章19－24節

なぜ、パウロはローマの人々に福音を伝えなかったのでしょうか？それは、この福音には「神の義が啓示されているから」と言いました。この福音のメッセージを信じることによって罪人に神の義が与えられる、神はその人を義なる者とみなしてくださいと、そのようなすばらしい力が存在するというのを私たちは見て来ました。なぜ、そこまでしてパウロは行くところすべてにおいて、キリストの福音を伝えようとしたのか、彼ははっきり知っていました。必ず人の罪はさばかれるということ、罪には神のさばき、審判が下るということをパウロは知っていました。そのことを話した上で、パウロはどうして神の審判が下るのか、どうして神の約束されたさばきが正当なのかということ、教えて行こうとするのです。そのことを私たちは見て来ているのですが、前回、私たちは特にこの18節で「どうして罪人がさばかれるのか」というその理由を見て来ました。二つありました。一つ目は「彼らの間違っただけにある」と、正しい選択をするのではなく間違っただけをしている、神の前に誤った選択をしているゆえにさばかれるということでした。同時に、神の前に、神に喜ばれるような生き方ではなく、それと全く相反する間違っただけの生き方をしているところに、その原因があるということ、教えてくれました。彼はそのことをより膨らませて行くのです。具体的な説明をそこに加えて行くことで、なぜ、神の約束されているさばきが当然の結果なのかということ、人々に悟らせようとしています。

☆なぜ、さばかれることが正当なのか？

1. 神の存在を認識しながらその神を受け入れない罪のゆえに

19節の初めに「**なぜなら、**」と訳されています。理由が説明されているのです。18節にはこのようがありました。「**というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。**」と、神は罪をご覧になっておられ、それを決して喜んでおられない、その罪に対して怒りをもっておられる、どれほど神が聖い正しい方なのか、そのことをパウロは前回、私たちに教えてくれたのです。そして、その神の怒りがどうして正当なのか、どうしてさばかれることが正当なのか、その理由をパウロは19節から説明して行きます。19節「**なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。**」、20節「**神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。**」、パウロがまずここで私たちに教えてくれること、それは、どうして罪を犯している人がさばかれるのか、どうして神の怒りを受けるのか、その理由は、神の存在を認識しながらその神を受け入れない、その罪ゆえだと言うのです。パウロはすべての人は神がいることを知っていると言います。知っただけながらその神を受け入れようとしないところに問題がある、その罪ゆえに、神の怒りが及ぶ、神のさばきがあるということ、言うのです。18節で「**不義をもって真理をはばんでいる**」と私たちは学びました。真理を受け入れただけでなく、かえって、神が喜ばれないこと、不義をもって応えている、この人間の罪はこれから私たちが学んで行くみことばの中に、より具体的に記されています。パウロはすべての人は神について知っていると言います。聖書のことばを聞いたことがなくても、少なくとも神については知っていると言います。この真実は私たちが抱えている大きな疑問に答えをくれます。どんな疑問でしょう？日本に福音が入ってくる前の人々はどのようなのでしょうか？一度も福音を聞いたことがない人はどうなるのでしょうか？みことばが教えることは、聖書のことばを聞いていなくても、聖書が届いていなくても、彼らは神を知っているということです。「神を知っている」とは、神について知り得るとか、認識できるということです。ヴァインというギリシャ語の学者はこのように言います。「この『知っている』というのは、神ご自身がご自身を知り得るようにされた被造物によって、この宇宙によって、イスラエルに与えられた特別な啓示がなくても、人の自然の能力によって知ることができる、そういう意味がある。」と。

19節に「**…彼らに明らかであるからです。**」とあります。明白だと言います。神がおられるということは人間に明白だと、そのことをパウロは説明するのです。19節の後半を見ると、なぜそのように言い切れるのか、そのことが書かれています。「**それは神が明らかにされたのです。**」と。同じことばが19節に使われていますが、面白いことに時制を変えているのです。「**彼らに明らかである**」というのは現在形です。ずっと人々の前に明白であり続けるというのです。なぜなら、「**神が明らかにされた**」というのは不定過去です。もう過去に神がそのようにされたのです。神がそのようにお決めになったのです。つまり、神は人々にご自身がお造りになった被造物、この宇宙によって、ご自身の存在を明らかにしようと

決められて、そして、それが明らかに示され続けていると、パウロは言っているのです。そして、その方法は何によって明らかにされるのか、神がお造りになった被造物によるのだということが20節に記されているのです。「**神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、…**」、神がお造りになった自然界、この宇宙、すべてのものは神がいるということをお明らかにしていると言うのです。非常に面白いことばをパウロは使うのです。「**神の、目に見えない本性**」、神は人間の目で見ることができない存在だと、当然のことを言っています。私たちのような不完全な目で見える存在は不完全なものです。完全な神を私たちは見ることはできません。「**神は霊ですから、**」とヨハネの福音書の中でイエスが言われたように、見ることはできない聖い正しいお方です。ですから、20節でも「**神の、目に見えない本性…**」と言うのです。しかし、同時に、20節の後半に「**はっきりと認められるのであって、**」と言います。見えない神がはっきりと明らかにされると言うのです。パウロはことばの遊びのように面白いことを言います。でも、彼が言いたいことは明白です。それは自然界をみれば神がおられるということは明らかだと。もちろん、神についてのすべてのことを知ることは不可能です。でも、少なくとも、私たちはこの神が造られた被造物を通して、目に見えない神について知ることができます。被造物は目に見えない神の明白な開示です。

20節にはその神の本性について二つのことが上げられています。一つは「**永遠の力**」と、もう一つは「**神性**」です。パウロが言いたいことは、

- (1) **永遠の力**：この自然界を見たときにそこに存在する神の力、また、神ご自身がその永遠の昔からすべてのものを統べ治めておられる、保っておられるその力を見ることになり、同時に、
- (2) **神性**：神のある一つの特徴の性質ではなくて、そのすべてのご性質を総称してこのように「**神性**」と言うのです。

ですから、簡単に言うなら、マイヤーという神学者が言うように「神が所有しておられる神のご性質のその全部を指してこのように『神性』と呼ぶ」と。ジョン・マレーという神学者は「神の存在と威厳と栄光とが目に見える創造物によって明らかにされている、その豊かさのことを考えてこのように語ったのだ。」と言います。つまり、確かに、神が造られたものを見たとき、そこにある神の力や神のご性質を見ることができます。そのことを私たちは今から見て行くのですが、私たちはこのことばの意味はどうかと細かいことを見るよりも、ここでパウロが言わんとしたこと、被造物を見ることによって神がおられること、そして、神がどれほど栄光にあふれたお方であるかということ、そのことを私たちははっきり見ることができるということです。それはみことばが繰り返し私たちに教えることです。

詩篇104を見てください。

「:1 わがたましいよ。主をほめたたえよ。わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方。あなたは尊厳と威光を身にまわっておられます。:2 あなたは光を衣のように着、天を、幕のように広げておられます。:3 水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし、風の翼に乗って歩かれます。:4 風をご自分の使いとし、焼き尽くす火をご自分の召使とされます。:5 また地をその基の上に据えられました。地はそれゆえ、とこしえにゆるぎません。:6 あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていました。:7 水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の聲で急ぎ去りました。:8 山は上がり、谷は沈みました。あなたが定めたその場所へと。:9 あなたは境を定め、水がそれを越えないようにされました。水が再び地をおおうことのないようにされました。:10 主は泉を谷に送り、山々の間を流れさせ、:11 野のすべての獣に飲ませられます。野ろばも渇きをいやします。:12 そのかたわらには空の鳥が住み、枝の間でさえずっています。:13 主はその高殿から山々に水を注ぎ、地はあなたのみわざの実によって満ち足りています。:14 主は家畜のために草を、また、人に役立つ植物を生えさせられます。人が地から食物を得るために。:15 また、人の心を喜ばせるぶどう酒をも。油によるよりも顔をつややかにするために。また、人の心をささえる食物をも。:16 主の木々は満ち足りています。主の植えたレバノンの杉の木も。:17 そこに、鳥は巣をかけ、こうのとりは、もみの木をその宿としています。:18 高い山は野やぎのため、岩は岩だぬきの隠れ場。:19 主は季節のために月を造られました。太陽はその沈む所を知っています。:20 あなたがやみを定められると、夜になります。夜には、あらゆる森の獣が動きます。:21 若い獅子はおのれのえじきのためにほえたけり、神におのれの食物を求めます。:22 日が上ると、彼らは退いて、自分のねぐらに横になります。:23 人はおのれの仕事に出て行き、夕暮れまでその働きにつきま。:24 主よ。あなたのみわざはなんと多いことでしょう。あなたは、それらをみな、知恵をもって造っておられます。地はあなたの造られたもので満ちています。:25 そこには大きく、広く広がる海があり、その中で、はうものは数知れず、大小の生き物もいます。:26 そこを船が通い、あなたが造られたレビヤタンも、そこで戯れます。:27 彼らはみな、あなたを待ち望んでいます。あなたが時にしたがって食物をお与えになることを。:28 あなたがお与えになると、彼らは集め、あなたが御手を開かれると、彼らは良いもので満ち足りります。:29 あなたが御顔を隠されると、彼らはおじ惑い、彼らの息を取り去られると、彼らは死に、おのれのちに帰ります。:30 あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。また、あなたは地の面を新しくされます。:31 主の栄光が、とこしえにありますように。主がそのみわざを喜ばれますように。:32 主が地に目を注がれると、地は震え、山々に触れられると、山々は煙を上げます。:33 私は生きてるかぎり、主に歌い、いのちのあるかぎり、私の神に

ほめ歌を歌いましょう。:34 私の心の思いが神のみこころにかないますように。私自身は、主を喜びましょう。

:35 罪人らが地から絶え果て、悪者どもが、もはやいなくなりますように。わがたましいよ。主をほめたたえよ。

ハレルヤ。

自然界のあらゆるものが神によって造られたということを教えています。同じ旧約聖書のアモス書5：8には「**すばる座やオリオン座を造り、暗黒を朝に変え、昼を暗い夜にし、海の水を呼んで、それを地の面に注ぐ方、その名は主。**」と、神は星までもお造りになったと教えています。この夜空に輝く星座を造られたお方、しかも、「**海の水を呼んで、それを地の面に注ぐ方、**」と、今から二千数百年も前から当時の人々が分からなかった水の循環のメカニズムを教えているのです。海の水が蒸発しそのほとんどが雨となって戻ってくる、今そのように科学者たちは説明し教科書で教えています。しかし、もうすでにアモスはみことばによって私たちに教えてくれます。神がそのようにお造りになったからです。詩篇8：3では「**あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、**」とあります。同じ詩篇19：1にも「**天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。**」とあります。イザヤ40：21-22を見てください。「**あなたがたは知らないのか。聞かないのか。初めから、告げられなかったのか。地の基がどうして置かれたかを悟らなかつたのか。:22 主は地をおおう天蓋の上に住まわれる。地の住民はいなごのようだ。主は天を薄絹のように延べ、これを天幕のように広げて住まわれる。」、26節「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない。」と。みことばは繰り返して私たちに神がお造りになったものを見てごらんください、そうすればそこに創造主を見ることができると教えています。恐らく、このようなことは、皆さんがイエス・キリストを信じる前にきっと感じたことがあったと思います。私もこのような星座の話を知るとうれしくなります。子どもの頃から星座を観測するのが一つの趣味でした。まだクリスチャンでないとき、いつも思ったことは、あの星空の暗闇の向こうに何があるのだろうかということでした。私の結論は、科学的ではありませんが、きっとあの向こうには何か私たちのすべてを支配している方がいるのだろうと、小学生のとき、そのように思っていました。聖書に触れたとき、答えが分かりました。間違いなくその方がおられると。でも、少なくとも、私たち人間以上の存在が存在していることを私たちは知っています。何かが存在するということを人々は認めます。パウロはそのことを言っているのです。そして、彼は付け加えます。それを知っていながら人間はその方がどのようなお方なのかを探ろうとしないと。そのことはこのローマ書のこの後のみことばの中で私たちが学んで行くことです。**

パウロは面白いことを言っています。パウロとバルナバがルステラという町を訪問したときに、そこで足の不自由な人を癒します。そうすると、ルステラの人たちはパウロとバルナバが神だと言って彼らを崇拝しようとし、パウロは当然、そのことを否定して、私たちはただの人に過ぎないと言って、崇拝することを止めさせるのですが、その中で面白いことをパウロは語ります。使徒の働き14章を見てください。バルナバをゼウスと呼んで、パウロがヘルメスであると、そのように呼んだ群集の中であって彼らが言ったこと、15-17節「**…「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。:16 過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。:17 とはいえ、ご自身のことをあかししないでおられたのではありません。すなわち、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてくださったのです。」**」、パウロが説明しています。パウロが言っていることは私たちが今このローマ書で見ていることです。神はこの自然界を使ってご自身のことを人々の前に明らかにして来られました。それは「**天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてくださったのです。」**と。私の家内の両親は農業を営んでいます。そこでかなり前ですが、聞いたことがあります。このようにぶどうを育てたり農作物を育てたりしていると、これは自然で人間の力でできるものではないと思わない？と。すると「当然だ」という答えが返ってきました。昨日も、ある人たちと話しているとき、ある人は農業に関して非常に詳しくはありますが、その会話の中で、どのような肥料を使ったら何が育つかと、そんな話になりました。どの植物にどの肥料が必要かということぐらい知らないといけませんよとその方は言われました。知っているのです。つまり、この自然界を見たとき、そこにあるものを見て、これは偶然にできたものではなく、そこにはすばらしい知恵が存在していることを私たちは見ます。私はグアム島で初めてタンクを背負って海に潜ったとき、感動が大きくて海の中でワァーとかウーと声を上げていたことを思い出します。余りにもきれいな海の中でいろいろな驚きがありました。その中の一つはイソギンチャクの中にクマノミという魚が共存していることです。不思議なものです。なぜ、イソギンチャクはクマノミを追い払わないのか、だれがそのような知恵を与えたのか、私たちはそれを見るときに感動します。神が造られたものを見るとき、私たちはそこに知恵

を見ます、力を見ます。私たちのあたまでは理解できないすばらしい知恵を見ます。パウロが私たちに教えていること、そして、この聖書が私たちに教え続けていることは、私たちが神が造られたものを見るとき、そこにはそれを造られた創造主がいるということです。今年の二月、アメリカのアトランタから次の場所に向かって移動していたとき、車からあるサインが目に入りました。「ヘレン・ケラーの生家」と。そこに行くにあの有名な井戸が残っていました。よく皆さんもご存じのあの三重苦の女性です。サリバン先生が神について初めてヘレン・ケラーに語ったとき、彼女の答えは「もうすでに神について知っている。ただ、その方の名前を知らなかった。」ということでした。驚きです。詩篇23篇のみことばを彼女が手書きで書いたものが写真といっしょに残っています。一人の信仰者として、そのように生きたのです。目が見えなくて耳が聞こえなくて語ることができなかったそのような女性にも、神がいることはしっかり分かっていたと、そのように彼女が証をするのです。

かつてのソ連で、原子力研究科の科長を務めた科学者の一人に、ボリス・ドチェンコという博士がいます。彼は神はいないという教育の中で育ったのですが、「私が興味をもった最も基本的な自然法則の一つに、エントロピーの法則というのがあります。これはどのような分子系の分子、原子、電子なども放置されるなら、時間とともに崩壊し、物質はますます無秩序に至るという法則だ。」「自然のうちにあるこの無秩序への傾向に対抗して、この宇宙を支配し、秩序ある形に保とうとする非常に強力な秩序化の力があるのは間違いない。なぜなら、宇宙は保たれているから。この力は非物質的でなければならない。なぜなら、物質であるならその物質自体が無秩序に変わって行くからだ。そして、私はこの力は全知全能でなければならないと結論した。つまり、すべてを支配する神、ひとりの神がなければならないという結論だ。」と。面白いことは、人々がこの神が造られたものを探って行けば行くほど、私たちは創造主に行き当たるのです。それを認めるかどうかは一人ひとりの問題です。そして、その問題をパウロは教えてくれるのです。多くの人々はそのことが分かっているがそれを認めようとしません。このすばらしい自然界を見て、それが神によって造られたということを認めなければ、あなたが認めていることはそれは偶然によってできたと言うのです。そして、私たちは分かっています。これは造られたと。でも、それを認めたくないのです。

パウロが私たちに教えてくれていることは、神が造られた被造物を通して人間はそこに創造主が存在することが分かっているということです。パウロがアテネの町を訪問したとき、そのアテネの町は偶像でいっぱいでした。今でもそうです。到る所に様々な神殿があります。「さて、アテネでふたりを待っていたパウロは、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じた。」と使徒の働き17:16に記されています。その後、彼はそのアテネ市街を歩きますが、神殿や偶像を祭った祭壇があったのです。そして、その中で「知られない神に」と刻まれた祭壇を見つけます。これは何を意味しているのでしょうか？人間は自然界に不思議を見ますが、それらを神格化するのです。それでもまだ恐れがあるのです。もしかすると、もれている神があるかもしれない、だから「知られない神」として彼らは祭壇を築いたのです。つまり、どこの国に行っても人間はこの神が造られた自然界に生きていて、そこに創造主なるお方を見出すのだと、そのことをパウロは私たちに教えてくれているのです。

ローマ1章に戻って、どうして人間は神について知ることができるのか、それは神がそのようにしようとなさったから、そして、神のことを私たちはこの自然界を通して知ることができるので、「彼らに弁解の余地はないのです。」とパウロは言っています。つまり、最初の質問に戻りますが、もし、福音を聞かないで死んだ人たちはどうなるのですか？日本に福音が入って来る前の人々はどうなるのですか？と、みことばが教えることは、その人々にも神はご自身のことをある程度示しておられた、神が造られた自然界を見ることによって、そこにそれらを造られた創造主なる方がおられることを彼らは認識するはずだということです。だから、「弁解の余地はないのです」、つまり、罪人が神のさばきの前に立つときに、「知らなかった」という口実は通らないと言っているのです。人間の問題はこのように神は被造物を通してご自身を明らかにしておられるにもかかわらず、人間の取った選択はその方を受け入れようとしません。「不義をもって真理をはばんだ」のです。彼らは真理を受け入れるよりも、それに逆らいそれを拒むという選択をしたということです。

2世紀の一人のキリスト教の神学者、テル・トゥリアヌスという人物がいます。初代教会の偉大な神父であり、はっきりとした年代は分かりませんが、紀元160年から220年くらいに生きた人であろうと言われています。彼はこのようなことを言っています。「私は思うに、生垣の一本の花、あなたの好きなどかの海の一個の貝殻も、そして、赤雷鳥の一本の羽毛でも、これらは創造主についてあなたに何も語らないだろうか？農業の法則を破れば収穫は失敗する。建築の法則を破れば建物は崩壊する。健康の法則に従わないとそれを害して苦悩する。パウロはこの世を見よ、この世がどのように構成されているかを見よ、この造られた世界から造られた神がどのようなお方が分かると言っている。罪人は弁解の余地がない。」と。今から約1800年ほど前の人物がそのように言うのです。自然界はそれを

造った神を明らかにしていると。私たちは余りにも忙しすぎて、神の造られた自然界の美しさをじっくりと味わう機会を失っていませんか？私はこの春のシーズンがとても好きで、大体4時半くらいに家のそばの公園ではカラスが鳴きます。それから20～30分後にまた別の鳥のきれいな鳴き声を聞きます。5時半くらいにうぐいすが鳴きます。その音を聞きながら「なんて神さまはすてきなすばらしい方なのだろう。このように様々なさえずりの音を私たちに聞かせてくれる」と思います。数日前に、泉北のあるところにいるときつばめがやって来て一生懸命さえずっていました。そのようなすべての鳥や動物や自然界をゆっくり見るなら、その美しさにその不思議さに私たちは感動するはずです。そして、私たちがそれをしっかり見るなら、それをお造りになったすばらしい神をそこに見るのです。自然界は神ではありません。自然界はそれを造った創造主なる神を私たちに明らかにしてくれるのです。

パウロはそのことを私たちに話した上で、だから、だれ一人としてこの神が造られた被造物の中に生きている一人として、「知らなかった」という弁解はできないと言うのです。

2. 神を知っていながら誤った選択をしているゆえに

21節を見てください。「**というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。**」、また、ここでパウロはその説明を加えて行きます。彼らは神の栄光を辱めているのです。神の栄光を認めないのです。彼はここで四つのことを説明して行きます。

- (1) 神を神としてあがめない
- (2) 神に感謝をしない
- (3) その思いはむなしくなり
- (4) その無知な心は暗くなった

神がいることを認めていながらその神を神としてあがめないと言います。この「あがめる」ということばは「栄光を与える」という意味です。欄外には「栄光を帰せず」と注釈がされています。そのような意味をもったことばが使われているのです。つまり、神だけが栄光を受けるにふさわしい方であるにもかかわらず、人間はその方に栄光を帰さないと言うのです。皆さん、ご存じですか？私たち人間は何のために造られたのか？被造物は何のために造られたのか？それは神の栄光を現わすために造られたのです。レビ記10：3でモーセはこのように言っています。「**それで、モーセはアロンに言った。「主が仰せになったことは、こういうことだ。『わたしに近づく者によって、わたしは自分の聖を現わし、すべての民の前でわたしは自分の栄光を現わす。』」**それゆえ、アロンは黙っていた。」、神がなさろうとしていることはご自身の栄光を現わすことです。神を愛する者たちを通して現わされるのです。歴代誌第一16：24－29に「**主の栄光を国々の中で語り告げよ。その奇しいみわざを、すべての国々の民の中で。：25 まことに主は大いなる方、大いに賛美されるべき方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。：26 まことに、国々の民の神々はみな、むなししい。しかし主は天をお造りになった。：27 尊厳と威光は御前にあり、力と歓喜はみもとにある。：28 国々の民の諸族よ。主にささげよ。栄光と力を主にささげよ。：29 御名の栄光を主にささげよ。ささげ物を携えて、御前に行け。聖なる飾り物を着けて、主にひれ伏せ。**」とあります。このみことばが私たちに教えることは、主の栄光を国々の中で語り告げなさいということです。私たちが神によって造られこうして生かされているのは、創造主なる神のすばらしさを世に証するためです。この自然界はそのことをしていると言います。だから、私たちはその自然界の美しさに感動するのです。その美しさが私たちに教えることは、それを造られた創造主は私たちが想像することができない美しい方であり、その自然界が私たちに教えてくれる知恵、どうして渡り鳥が飛んで行くのか、どうして川に魚が遡上して行くのか、どうして？という様々な疑問のそのすべてにそのようにお造りになった神の知恵を見るのです。そのとき、私たちは創造主なる神は私たちよりはるかに知恵のあるお方であることを知ります。自然界は神のすばらしさを証しているから、私たちはそれに感動させられ心が和みます。でも、そのために造られたのではありません。自然界は神がどんなにすばらしいかを一生懸命証しているのです。

問題は私たち人間です。私たち人間だけが創造主のために生きようとしません。創造主のすばらしさを証しようとしません。それよりも自分の人生だ！と言って自分の好きなように生きているのです。神に逆らい続け、神のみこころよりも自分の考えを優先してしまう、神のために生きるより自分のために生きている、それが私たちです。もしかすると、この中に「いや、私は違う」と言われる方がいるかもしれませんが、その方が自分に問い掛けてみなければいけないことは「では、私は神のみことばに従っているか？」ということです。私たちが神を第一にして神の栄光を現わすために必要なことは、神のみことばに従うことしかありません。神のみこころに沿って行くときに、神は私たちに祝して下さり、用いて下さり、私たちを通して神のすばらしさを証して下さる、それ以外の方法はないのです。私たちは神の栄光を現わしたいけれど、自分の好きなように生きたいというのです。そこには大きな矛盾があります。「**神を神としてあがめず**」、つまり、神に栄光を帰そうとしない、神からその栄光を

奪おうとします。

自分が誉められたい、自分が認められたい、自分の好きなように生きたいと神を無視して神に喜ばれる生き方をしない、そうすると私たちから「感謝」が無くなって行きます。そして、その人の「思いはむなしくな^{って}」行くと行きます。その人の心はどんどんむなしくな^{って}行きます。前回も見たように、好きな生き方をするならそこには本当の満足があるのではないかと私たちは期待しますが、そこには満足はありません。むなしさだけです。一時的には楽しい！と思うかもしれませんが、それは永続しません。すぐに無くなってしまいます。その結果、「無知な心は暗くなる」と行きます。ますますその人の心は暗くなるのです。しかも、「心」ということばを使っているのは、その人の心が暗いからその人のすべてにおいて暗くなる、喜びがないと行きます。なぜなら、「心」はその人のすべてを、すべての行動を司っているところだからです。心の中に暗闇があるから、行動においても考えにおいても希望、喜びがないのです。問題は、神がご自身を明らかにしておられるのに、その神を知っているがその神に心を開かないところにあるのです。それが私たちの問題だと。だから、パウロは行きます、罪人に「弁解の余地はない」と。だから、さばかれる、神があな^たをさばいても当然だと言行きます。なぜなら、神はこのように私たちにしっかりとご自身を示してくださ^り、そして、神を信じる者に救いを与え^ると言われたからです。私^{たち}人間はその救いを拒むだけでなく、その神に対して心を開^きて受け入れようとし^{ない}のです。だから、神は約束されたようにそのさばきをその人にもたらそうと行きます。だれ一人として神がな^さることに反論できないのです。

今日、私^{たち}がしっかりと覚えておきたいこと、クリスチャンである皆さん、あなたは神が造られた自然界の中に生きていてその創造主なる神を心から誉め称えておられますか？次回、私^{たち}は詳しく見て行きますが、神に栄光を帰そうと、神のすばらしさが現われたならそれでいいと、そのために生きておられますか？私^{たち}は食べるにも飲むにも何をするにも神の栄光を現わすためにしなさいと言行われています。そのように私^{たち}は生きていますでしょうか？神さま、今日の私のことばを使って私のすべてを通してあなたが喜んでくださ^り、私の周りの人たちが私のうちにいるあなたのすばらしさを見ることのできるように、どうぞ私を使^ってくださいと、そのような祈りをもって一日一日を歩んでおられますか？それとも、抱えている様々な問題の中にあ^って、神に愚痴と不満を言行しながら、神さま、早く私のいのちを取^ってくださいと神に怒りをもって歩んでおられませんか？そのような生活から私^{たち}は救い出されたのです。神をあがめる者に、神を称える者に、自然界がしているように神のすばらしさを世に証するために、信仰者の皆さん、そのように生きてください。神の恵みを覚えながらそれを感謝する者として歩んでください。

そして、この中にまだ神の恵みを受け入れていない方がおられるなら、神はあなたを待^っておられます。その救いを与えよう^と。すべてを造られあなたを造られ、あなたに罪の赦しを与えてくださ^る、この真の神の前に救いを求めて出て来ることです。そのとき、神はあなたに救いをくださ^います。そのことを神は願^ってあなたを待^っておられるのです。どうぞ、その方の前に心を開^きさないでください。